

# たまには古典も読んでみる 西洋の古典

マックス・ヴェーバー著

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 岩波文庫

**講** 義では多くの経済学者

の学説が取り上げられるけれど、その原典を読む機会はとて少ない。他人の口からじゃなくて、本人から色々と聞いてみることも大切だ。本は読む人によって読みかえられるものだから、自分なりの読み方ができたらいいと思う。古典といわれている著作ほど、様々な読み方ができるものだ。本をたくさん読むのが嫌なら、古典を一冊だけでもいいからじっくり読んでみるといい。ここにあげるヴェーバーの著作は社会科学の古典のひとつ。この本は、近代初頭の西ヨーロッパで資本主義経済が形成されてくる過程で、禁欲的なプロテスタンティズムの経済倫理が果たした役割について論じているが、経済学あるいは社会科学全般を学ぶものにとって、様々な重要な問題を投げかけてくる。そのひとつは、「非合理的な合理性」。経済学で想定



されている人間というのは、働き利潤を追求していくことそれ自体を目的とするような合理的な「経済人」である。でも、たくさんある生き方の中から、そんな生き方を人々に選ばせたものは何なのか？確かに、いったん資本主義経済の仕組みができあがってしまうと、それにしがたう他ない。けれど、そうした社会ができあがる過程では、そこに何らかの非合理的な力が働いていたのではないかと考えられるはしないか。人々が経済活動に込めている意味を歴史的に遡って考えてみることは、経済社会の行く末を見通すうえでとても大切なことのように思われる。

唐澤 達之 (からさわ・たつゆき)  
経済学部助教授  
1984年立教大学経済学部卒業、1989年立教大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。1997年より本学勤務。専門分野は西洋経済史。主要な研究テーマは、近代初頭のイギリス都市史。都市という場で人々が織りなす様々な社会関係（男女関係、親子関係、隣人関係、その他）に関心をもつ。趣味はジャズ。最近20年ぶりにまたギターを弾き始めた。

